戦旗

一九六〇年八月二日発行
発行所
新宿区東大久保二の一五五
世界労働運動研究所
編集 発行人　鏑木　潔
一部　拾円

万国の労仂者団結せよ！
革命的前衛・共産主義者同盟を
すべての工場に組織せよ！
共産主義者同盟

「戦旗」固定購読
お申込みは
新宿区東大久保二の一五五
世界労働運動研究所内
戦旗経営局
定価　一部　十円
月　四〇円　半年　二四〇円

小ブル的困惑を打破り
資本攻勢の推進者 池田内閣との闘いを組織せよ

（一）

池田内閣が登場してから半月間を経過した。日本で始めての婦人大臣を任命するというキャッチ・フレーズのもとに登場した池田内閣は、安保闘争でこうむつた政治的敗北から日本ブルジョアジーを立直らせ、失われた「世論の回復」にその全エネルギーを集中しているかのような姿勢をとつた。就任直後の記者会見で「安保をめぐる学生運動の混乱については政府の方でも反省すべき点はあつたと思う。」とのべ、さらに「貧乏人は麦を喰え」といつたことは「若気のいたりであつた」と陳弁に終始した。それ故に商業ジャーナリズムはいつせいに池田内閣の「低姿勢」をマス・コミの上に定着させたのであつた。したがつて五・一九以降の激動の一ケ月間を「民主々義の破壊にたいする怒りの爆発」としてしかとらえることのできない小ブルジョア的潮流は、その必然的な帰結として、池田内閣の「低姿勢」にたいして闘う目標を見失い、明らかに困惑の色を呈し始めたのである。なぜならば、一ケ月にわたる自民党内部の派閥間の争いと混乱にもかかわらず、岸から池田へのバトン・タッチは、ほぼ、既成の事実として考えられていたし、池田内閣の登場は、岸がなすべくしてなしえなかつた安保採択強行後における日本ブルジョアジーの政治的プログラム――刑法改悪を頂点にデモ禁法、道交法、警職法の改正、国家治安法、防諜法などの一連の治安立法の制定、さらに「集団暴力排除」の名のもとに労働運動にたいする根こそぎ的弾圧を狙う労働三法改悪を中心にＩＬＯ八七号批准に見合う国家公務員法、地方公務員法、公労法、地公労法の改正と、国鉄、郵政、電々に通ずる罰則強化の単独立法の制定、それは、安保改定後における日本帝国主義の進出を保障するべき国内体制確立のために意図せる、日本ブルジョアジーのプログラムを意味していた――を最も忠実に代行する最適の内閣として考えられていた。だが、一見、「低姿勢」とも思われる池田の笑顔から流れでた媚態は、小ブル的潮流を惑わすには全く十分な役割を果したといえる。すなわち「当面、池田内閣は、国民にたいして低姿勢のよそおいをとり、党内にたいしては派閥均衡で事態をごまかそうとするだろうが、やがてはその官僚的権力主義、金力主義の本質をむきだしにしてくるであろう。」という七月十九日の社会党声明に端的に代表されるように、池田内閣の本質は「治安内閣」「弾圧内閣」であるが、その本質が直ちに暴露されるのを恐れて、現在は低姿勢をよそおつているという安易な評価が労働運動内部に流れ始めたのであつた。しかも、きわめていかんなことながら、かかる見解がわが同盟内部にも存在し、それは来るべき階級決戦をいかに準備するかという労働者階級の前衛の任務と役割を追求していくこととの関連において、深刻な問題を提起しているのである。そしてこの問題をめぐつて明らかに日和見主義的誤謬とも思われるものが理論的にも思想的にも現われている。誤謬は二つある。

第一は、階級決戦の準備を口にはしながらも、階級決戦の準備という課題から前衛の当面する政治的、実践的任務を導きだすのではなく、逆に、いわゆる単なる「客観情勢」の分析からのみ前衛の任務と行動方針を導きだそうとする、いうならば、微視的観点にのみ貫かれた理論と思想である。その結果、池田内閣「低姿勢論」に毒され、闘う方向を見失い、小ブル的動揺と困惑をただよわせることになり、それ故に、抽象的に図式化していうならば、来るべき階級決戦を、前衛の主体的活動を全く抜きにした「客観情勢」の推移によつてのみ語ろうとする傾向が無意識のうちにも流れこんでくることを余儀なくさせているのである。それは一言でいえば、客観主義でしかありえない。

第二は、その全く機械的反撥として存在する単純な「階級決戦怒号論」である。それは客観主義的誤謬に比較するならば、今日の時点においては、第二義的、派生的な問題にしかすぎないとはいえ、起りうべき労働者階級の個々の闘争にたいして単に階級決戦を怒号するだけのなんの役にもたたない観念論であるばかりでなく来るべき決戦に備えるべき同盟の理論的、政治的、実践的諸準備にたいする過少評価をもたらさずにはおかない。

五・一九、二〇を契機に前進を開始した労働者階級のエネルギーを有効に組織しえず、その上、六・一五によつてきり開かれた新たなる局面を政府危機から政治危機にむかつて発展させることができずに、六・一八による安保闘争の挫折は、われ〳〵にたいして深刻な教訓をもたらさずにはおかなかつた。そして日本革命運動における安保闘争のもつ決定的意義と役割に対する同盟内部の理論的、政治的、組織的な完全な意志の一致とそのもとにおける中央から細胞にいたるまでの全同盟員の戦闘的武装の欠如は、うちつづく個々の局面における同盟活動の限界と弱点をさらけださずにはおかなかつた。それ故にこの期間における前衛としての機能のそう失は、同盟中央委員会と政治局の解体的状況をもたらし、その克服のために徹底的で原則的な批判と検討のメスがふるわれねばならず、同盟の革命的再建と再組織は、今日緊急な課題として全同盟員の前に横たわつているのである。だが、そのためには、現にあらわれている日和見主義的ともいえる誤謬を克服することなしには全く不可能であり、当面せるこの理論的、実践的課題の追究を抜きにして同盟の再建がかたられるとするならば、再び「労働者階級の中における圧倒的影響力の欠如」という一般的な観念と図式のくり返しに終つてしまわないとは必ずしもいいきれないであろう。

（二）

池田内閣は単なる「治安内閣」でも「弾圧内閣」でもない。勿論、このように規定するのが完全な誤りであるというのでは必ずしもないが、問題をこのようにのみ見つめる時、それは、小ブル的な民主々義的潮流のしのびこむことを余儀なくさせるであろう。五・一九以後の激動の一ヶ月間の背景を貫く本質は、内閣好のいう様な「民主々義か、独裁か」では決してなかつた。それは明確に意識されていなかつたとはいえ、五七年の新潟闘争以後の労働運動のうちつづく敗北と後退、そのなかにおける日本帝国主義進出のため国内の経済的基盤を構築せんとする全産業にわたる合理化と搾取と抑圧の増大は、「岩戸景気」のなかにあつても着実に進展していつた。そしてこの資本の側から加えられる攻撃のもとで次第に蓄積されてきた大衆の怒りは、なんらかの契機さえ与えられるならば容易に爆発するべき要因をはらんでいた。強行採択がまさにその契機となつたのであり、さらに六・一五闘争が第二の契機となつたのである。（勿論五・一九と六・一五との決定的相異を忘れてはいけない）それはまさしくブルジョアジーとプロレタリアートの激突の現実的な表現形態であつたし、それ故にこそ、闘いを民主々義の枠内におしとどめようとする既成左翼をも含めた一切の小ブル的潮流との非妥協的闘争が、激動期であればある程、現実的な重大性をもつていたといえる。ブルジョアジーは六・一五によつて打撃をこうむつたにもかかわらず、六・一八による闘争の挫折をみるや、直ちに巻き返しの準備にはいつた。岸から池田へのバトンタッチはたしかに国内治安体制の確立を第一義的な目的としており、ブルジョアジーの側における来るべき階級決戦にそなえるものでしかなかつた。小ブル民主々義者は治安の確立ということによつて民主々義的権利が奪われるが故に池田内閣に反対しているが、まさにそれ故にこそ、治安政策と弾圧政策が法制化などの一定の具体的表現をとつて登場しない限り、闘争の目標を設定することができずにいるのである。

だが、池田内閣は文字通り、日本ブルジョアジーの意志の具現者として登場してきている帝国主義内閣である。かれらが就任の直後、間髪を入れずに手をつけたものは何であつたか。流血の惨事をさけるという名のもとに、三池闘争にたいする直接介入であつた。昨年十一月の中山あつせん案と本年四月の藤林あつせん案を基盤として中労委あつせん案を作成するという中労委あつせん申入れを提出させることによつて、三池闘争を全ブルジョアジーの側に有利に解決し、あわせて流血の惨事をさけたことを理由に池田内閣の安定的基盤を築きあげんとねらつたものであつた。今日までのところ事態の進展はいかんながら彼らのねらいを成功させつつある。さらに第二に、「学生運動の混乱は政府にも責任がある」などという、虚言を呈しながらも、四・二六で逮捕された唐牛全学連委員長などをいまだに釈放しないばかりでなく、全学連幹部などにたいする逮捕の連続と国労を始め労働組合幹部に対する処分の連続であつた。たしかに池田内閣は、秋の総選挙をひかえて一定の迂回作戦を辿つているようでもあるが、それは低姿勢か高姿勢かという単純な理論をもつて律しきれるものでは決してないであろう。警職法闘争以後も、日本ブルジョアジーは、一定の迂回作戦をとつた。だが、その間、社会党、共産党の影響力のもとにおかれていた日本のプロレタリアートは、なにひとつ闘うことはできなかつた。労働組合は選挙準備のためにその機能を解体してしまつたのである。

今日、すべての「既成左翼」が選挙準備にあけくれ、階級闘争を放棄している状況のもとにあつて、ただ単に池田内閣の迂回作戦のみを指摘し、同時に資本と労働の矛盾の増大がらひき起される階級決戦の準備を無内容に語るだけでは全く不十分であるとしかいえない。

勿論、三池闘争によつて階級闘争の全局面が転換し、階級的決戦が訪れるなどと簡単にいうことはできない。また、合理化反対闘争が、階級決戦そのものであるなどと単純化していうことはできない。さらに、労働組合の秋期年末闘争が階級決戦だなどというのは愚かな理論でしかない。問題は、敵が「迂回作戦」をとつているから決戦が訪れるまで待つのではなく、個々の闘争を非妥協的に闘い抜きながら、決戦の時期を促進することでなければならないのである。

五・一九以降の激動は、けつして、同盟活動の主体的努力のもとでひき起されたものでもなかつたし、また強行採決が行われるならば、激動が開始されることを予測した上で、開始された激動に直ちに備え、その主人公として完全に登場することもできなかつた。それ故にこそ今日、来るべき階級決戦の内容とそれをいかにして準備するかについての明確な把握と方向づけがなによりも必要なのであり、同盟再建の課題とはまさにそのことを意味している。したがつて同盟再建の課題が理論の問題であると同時に組織の問題であるのは、右の理由にもとづいているのである。

（三）

五八年九月、第一回藤山マッカーサー会談を皮切りに日米ブルジョアジーの間において安保改定交渉が開始されたが、警職法闘争によるブルジョアジーの政治的後退は、その後半年間にわたつて参院選の勝利と政治的安定をかちとるまで、いわゆる迂回作戦を辿らざるをえなくせしめた。だが、池田内閣の迂回作戦――その言葉自体適切でないが――とはそのようなものではない。秋の総選挙における自民党の勝利と池田・佐藤派の党内主導権の確立後に、一挙に治安立法を法制化し、政治的攻勢にでるであろうがゆえに、階級間の激突が開始されると単純に立論することは誤つている。（もちろんそのような事態が絶対に起らないというわけではないが）池田内閣の使命として存在しているものはまず第一に新安保成立後における日本帝国主義の国内的基盤の確立、換言するならば、国際競争戦にたえぬくための日本経済の体質改善とそれを促進するための積極的な財政金融政策の推進にある。そして既に岸内閣当時（六月廿四日）発表されたところの貿易為替の自由化計画を推進し「企業の生産性の向上」つまり、資本の貪慾な利潤の追求と蓄積をはかることにある。すなわち、「商品別の自由化計画」は、その時期を①早期（一年以内）②近い将来（三年以内）③所要な時期をかけて④相当期間困難の四段階にわけ、三年後に八〇％達成することを目標に、エネルギー・金属・非鉄金属と同鉱石・機械・繊維・軽工業・農村漁業の七部門を組合せながら、この秋から開始されることになつている。そして既に自由化の促進にそなえて、ブルジョアジー内部における暗躍が開始され、資本相互間の競争と対立と矛盾が激しくなろうとしているばかりでなく、その必然的な帰結として個別資本内部における搾取の増大を呼び起し、企業合理化が一層促進されうる状況をかもしださずにはおかない。それゆえに、いたるところで生産過程内部における資本と労働との矛盾の爆発が惹起されうるべき客 [illegible]

同友会が経済秩序の確立をいずれも強調していることは、まさに右の事実を端的に表明したものであるといえる。岸内閣が安保改定後に予定した治安立法は、そのことごとくといつてもよいほど、労働争議にたいする直接的介入を意味しているものであり、現に池田内閣の山崎国家公安委員長（この戦前の内務官僚！）が治安対策等は立法でなく、警察官一万人の増員と待遇改善、機動隊の機構改革による機動力増大等で行うことを決めた事実等、を考えるならば、単純に、いわゆる「政治情勢」の分析から直線的に階級決戦を唱えることは、全く不十分なことであるばかりでなく、そのような視点に終始しているならば四九年闘争の敗北 [illegible]

日常的に展開されるプロレタリアートの資本にたいする闘争が激発し、政府、ブルジョアジーをして、このプロレタリアートの産業別にまで高められた、あるいは地域的な極限にまで高められた闘争を暴力的に圧殺せざるをえないような状況をみずから主体的に形成していくとき、そこに来るべき階級決戦の真の姿が浮きぼり的にかもしだされてくるであろう。（恐慌の問題についてはさらに緻密に検討しなければならないにせよ、すでにブルジョアジー自身、景気後退について憂慮しはじめている以上、生産過程における闘争が激化し、危機が深刻になる要因は、ます〳〵大きい）。それ故にこそ、合理化反対闘争が政策転換としてではなく、合理化そのものを粉砕することにあるという問題が、ただ単に一般的原則として強調されるだけでは不十分なのであり、来るべき危機と階級決戦との関連において語られるとき、きわめて現実的な、深刻な問題として提起せざるをえなくなるのである。それ故にこそ生産過程内部における資本に対決するプロレタリアートの非妥協的闘争ということが、一般的なにおいてではなく、現実的な、階級決戦を準備していくべき闘争として位置づけられなければならないのである。かつて一九四八年十二月、ドッジ・プランにもとずく経済安定九原則がうちだされ、ブルジョアジーは日本資本主義の再建政策として輸出の増進を目標にそれにみあう企業整備と金融財政政策の転換をうちだし、翌四九年、第三次吉田内閣のもとで資本の大攻勢が展開された。そのとき、日本労働運動に圧倒的な影響力をもつていた日共は、四九年の危機に対する主体的準備をなにひとつとしてしなかつたばかりでなく、「民族資本論」などの反革命的な裏切りによつて四九年闘争を完敗にいたらしめ、そのことによつて今日の日本帝国主義の基盤を構築せしめたのであつた。今日の事態が四九年当時と全く同じだというわけではない。だが、貿易、為替の自由化が世界資本主義のひとつの潮流となり、日本商品のボイコットなどが各資本主義国で起つているような国際競争戦の激化している状況の中にあつて、「財政、金融問題の専門家」として知られる四九年当時の蔵相池田が、岸に代つて登場してきたのは、決して池田が自民党内の派閥闘争に勝利したという単純な理由からだけでなく、日本ブルジョアジーの政治委員会のチャンピオンとしてまさにうつてつけの男であつたのである。それ故にこそ、この池田内閣に対して、「治安内閣」だとか、「低姿勢、高姿勢」というような、マルクス主義的分析をはなれたジャーナル的な言葉をもてあそんでいたならば、危機はプロレタリアートの危機として登場せざるをえないことを知るべきである。

今日、同盟の理論的停滞と、その危機が叫ばれていることが、それを一般的な意味において強調するのであるならば、決定的に誤つている。来るべき階級決戦を主体的に準備し、同盟が真の前衛としてそれにたえうるかいなかは、以上のべてきた課題に対して、同盟が緊急に思想的、理論的、組織的に確立するか否かにかかつているのであり、それ故にこそ、この新たなる状況のもとにおける日本資本主義の各産業部門の解明まで含めた全面的分析と労働者階級の主体的状況、闘う方針を緊急に確立せねばならないきわめて現実的な理由が存在しているのである。

×　×　×

日共また香典泥棒
中国人民からの百四十四万円
バクロおそれ国救事務員をクビ

日共が故樺美智子同志の死にたいして全くの反革命にも等しい言動をはき、その内部においてすら論争たる非難が起つている [illegible] 中国から救援資金が送られて [illegible] 日本国民救援会本部は、六月十 [illegible] 六・一五の救援に [illegible]

が、人民救済会は早速この要請に応じて七月十五日附で救援資金を送つてきた。すなわち、「先頃、貴国救護本部より六・一五の受害者と日米軍事同盟条約に反対して被害をうけたものへ対して救済カンパに関する文書をうけとりました。岸の気狂いじみたやり方は樺美智子さんを殺し、大量の愛国の士を傷つけ、逮捕した。恥しらずな行為は中日両国人民と世界の平和を愛する人々の限りない憤激を買つている。」という意味の手紙をつけて、六・一五の医療及び救援に宛てて下さいとして中国人民幣一万元（日本円約百四十四万円）を国救本部に送つてきた。六・一五直後、岸政府の暴虐にたいしあらゆる層の労働者階級の憤激を呼び起し、それに押されて国救を私物化している日共党員たちも救援活動にのりださざるをえなかつた。だがそれはあくまでも形式的なことであり、一片の要請を各組織に流しただけで、そのための具体的組織活動をなにひとつ行わずに、もつぱらハガチー事件の救援活動のみを行つていた。それ故、中国からの救援金の送金は彼らにとつて晴天のへき歴の出来事であつた。それ故、最初の中はこの事実を全学連にはなにひとつ知らせることなく、日共党員で固める常任理事会を開いて、中国からのカンパはあくまでも弾圧犠牲者にたいする一般的なカンパであると確認し、国救の救援資金に繰り入れようとはかる策謀を開始するに至つた。香デン泥棒とはこのことをいうのだ。そして六・一五のカンパ帳を使つて労働組合がカンパを集めようとするとそれをおさえてまわつたのは国救の日共党員であつた。その上、この策謀のバレるのを恐れて以前から日共の卑劣なやり方に反対しつづけてきた一事務局員の首を切り、日共救援会としての本質をさらすだけに至つた。問題は明白である。百四十四万円を直ちに六・一五犠牲者救援資金にふりあてろ!!詐欺師の日共党員を国救から追放せよ!!

原水禁第六回世界大会

八・九弾圧反対デモロ火に
池田内閣打倒へ
「樺世界平和賞」流産の責任を追求せよ

（大会の意義）

第六回原水禁世界大会は、二日からの予備会議に続いて、六日から九日まで、全く同様のスケジュールで開催される。内外の「階級闘争の中で、「原水爆反対」では通用しなかつたこの大会は、 [illegible] の慰霊祭を中心とする [illegible] 党の分派と、民社党の [illegible] 原水協とを分出し、 [illegible] 身一つのお祭りのようなものにしつつある。 [illegible] この大会は三・四・五 [illegible] よりはるかに比重は少いとは云え、安保闘争を直接 [illegible] た力が、限定されて [illegible] が、結集をする点で [illegible] べきものであり、第 [illegible] その中で安保闘争の中で [illegible] れたさまざまな政治的 [illegible] が、はげしく闘われる [illegible] に意義がある。

「軍備全廃」等々の [illegible] 見られる通り、現実の [illegible] 闘争から完全に遊離し [illegible] 小市民的幻想が圧倒的 [illegible] 響力を持つとは云え、 [illegible] 中で大会の二つの意義 [illegible] 安保闘争の力の結集と [illegible] う路線の推進とを、 [illegible] 進めることが、革命的 [illegible] 者、学生、市民の課題 [illegible] る。

（本年に「闘う大会」 [illegible] 安井原水協理事長は、 [illegible] 昨年の大会が、〃嵐の [illegible] 大会〃なら、今年は〃 [illegible] 大会〃と呼ぶべきだ [illegible] るが、本当に [illegible]

[illegible]

ばかりか、この討論の [illegible] 会を混乱させた全学連を、 [illegible] として、その後一貫 [illegible] 攻撃して来たのは一体 [illegible]

[illegible] 闘いと、この犠牲者樺同志への国際的讃辞をブチこわした者は闘う人民の敵としてこの大会において追放されねばならぬ。国際会議を [illegible]

[illegible] た論理で貫かれている。これは、敵を「軍国主義勢力・冷戦派」ときわめて非科学的に決め、これを追いつめることを中心任務とし [illegible]

[illegible] 排して生きた闘争の総括とその上に立つて支配階級と闘う方針を、たとえ小ブル的ワクを出ないにせよ打出すことが、最小限必要なのである。

（池田内閣との闘いへ）

この様な立場から思えば、六回大会の最大の目標は、日本帝国主義と、その政治委員会池田内閣と、いかに闘うかを徹底的に討論して打出すことである。華々しく「軍備全廃」が語られている時、日本帝国主義の強力な進出のために、強力な財政政策の名のもとに、労働者階級への攻撃が始まつているのだ。「治安攻勢は選挙後」といわれていることが、池田内閣の完全に資本の利益のために動いている姿をかくす上に、いかに役立つているかをはつきりさせ、この敵の恐るべき本質を徹底的に暴露しきまりにし、広汎に労働者階級の中にある池田への不信を、はげしい怒りに高めることが必要なのだ。たとえ名前が「軍備全廃」であろうと、集つた労働者を中心とする闘う人民を、池田内閣との闘争へケツ起させることこそ、この大会のかちとるべき目標である。

（九日首相官邸デモを）

池田内閣との闘いも、ただ言葉でこれをバクロするだけでは一歩も進まない。これに対する大衆闘争を組織しそれに対する池田の出方によつて、その本質を人民の前に浮きぼりにすることが必要である。

日和見主義者は、「安保破棄の闘い」として、日中国交回復と基地闘争を、彼等なりに戦闘的な形で前面に出してくるであろう。これに対して、池田内閣の弾圧に対する大衆的なデモを中心とした闘争を組織することが、当面の課題である。労働者の処分反対ストライキを、組合のワクの中における、当局に向けたも [illegible]

[illegible] は、民青を動員して三百名を送り込もうとしている。全学連は、これに対し八・九首相官邸デモをする一方

★帝国主義打倒なくして軍備全廃なし！
★五回大会で安保反対決議を葬つた原水協の中広イズムを追放せよ！
★治安反動攻勢の第一歩、安保闘争に対する一切の処分・弾圧を許すな！
★樺さんの死を無にするな！樺さんへの世界平和賞を握りつぶした安井・平野氏は責任をとれ！

の四本のスローガンを中心にした対案をもとに、昨年同様労働者等の有志と結んで「統一方針」をもつて闘う方針を決めている。官僚統制を打破り、大会を私物化する代々木の動員を打破り「闘う大会」とするためには、全国から集まる革命的労働者市民が、全学連を中心に結集することが最大の戦術である。

赤雷

☆安保闘争の中で日共のとつた態度は、さすがに深刻な動揺を党内にひきおこしている。谷川雁が「乗りこえられた前衛」と脱党宣言をブッ放した後、関根弘は「現代詩」八月号に痛烈な党弾がいをやつている。

☆彼は、羽田デモ救援の発起人になつたが党中央に叱られてこれを辞退したことを、正直に自己批判し（文化人にはめずらしいことだ）、樺さんを攻撃する「アカハタ」を引用して『キチガイのお叫ぶ』と断言している。

☆日共や左翼知識人が、神聖視する中国が、六・一五や樺さんの闘いに対し絶大な評価をあたえていることは、彼らにとつて最大の困惑の原因である。安保闘争最中に訪中していた、中島健蔵、野間広、大江健三郎らの文士は、毛沢東の絶大な讃辞をきいて戸惑つたという。毛沢東は「樺さんの家まで行くようて [illegible]

大衆闘争で獄中の同志を取戻せ

一千万円救援カンパを！

獄中の同志へ手紙を！

池田内閣が「低姿勢」だなどと言つている間に、安保闘争に対する国家権力の復讐は、これまでにない残酷さをもつて現に進められている。四・二六以来逮捕され現在なお拘留されている同盟、学連関係のものは、別表のとおり二十三名にのぼり、これに三池で七月二十二日に逮捕された十八名を合せると、実に四十一名の同志が獄舎につながれている。これにハガチー事件に関して二十六名、六・一五で平凡社の労働者一名が逮捕拘留されており、ハガチー事件、六・一五に関して逮捕はさらに拡大しつつある。検察当局は六・一五を中心に連日の国会デモを公案条例違反を中心に追求しており、最高裁の公案条例合憲判決はきわめて政治的意図をもつた武器として彼等に与えられた。検察側は、社会党田中代議士をはじめ、国民会議水口事務局長ら幹部を取調べる一方、直接闘争の指導部として、全学連とわが同盟の中枢へ黒い手をのばしている。全学連北小路書記長、加藤副委員長、有賀東大中央委員会議長をはじめ学連の中心幹部を根こそぎパクルため、彼等は全学連大会を包囲したり、同盟五回大会を機動隊をもつて襲撃したりしているが、これに続いて同盟中央のメンバーをパクルために全力をつくしていることが、取調べの状況等から明らかによみとれる。これと並んで、国際問題としてハガチー事件を独自に追求し、さらに群馬知事選を前にした国労高崎地本の弾圧など、敵の攻撃はきわめて政治的なことが明らかである。

われわれの中に、学連等への弾圧に不感症になつている面はないだろうか？さらに、彼等はあらゆる法の慣習も捨てて、中心部分を半永久的に獄中につないでおこうとしている。全学連の責任ある地位にある者が、何度か責任者として弾圧されるのは、役職上必然的なものであるが、敵はそれを口実に前回の事件の保釈を取消し、事実上、無期禁固刑と同様に取扱うことによつて、学連活動を壊滅させようとしていることは明らかである。唐牛委員長、篠原社学同委員長は、四月二十六日以来すでに三ケ月余も拘留され、今後も二、三年は出さない方針であり、五・二〇以後捕えられた、全学連宮脇中執、同盟労対大島同志、全学連清水前書記長らも同様に保釈取消しにすると云つている。さらに、今後、北小路書記長、加藤副委員長らが逮捕されれば、同様処置が取られるであろうし、四・二六で逮捕され保釈されたばかりの藤原社学同書記長を、三池に行つたカドで再拘留する準備も進めており、こうした弾圧が『完了』すれば、九月新学期とともに開始されるべき学生運動の指導部は、全学連の三役在京中執、書記局員の六割が獄中、社学同も三役書記局員の大半が獄中といった状態で行われることになる。これは、いかに革命的学生運動のエネルギーが不滅であるとはいつても耐え難いものであり、弾圧によつて学生運動が崩壊することも、現実の危機として認識しなければならない。

さらに、十月から始まると予定されている公判は、被告数のべ百名を超えるものとなり、その費用は一千萬円を超える。救援は、別記前田弁護士の事務所に置く全学連不当弾圧対策委を中心に進められており、目下一千萬円カンパ（保釈金二百萬円、差入れ二百萬円、弁護科五百万円、その他百万円）を今年中に完了する目標をたてているが、各種救援組織（国民救援会など）が日共の策動によつて「トロツキストの救援」を拒否し妨害しているため、困難を極めている。これに対し、社会党、進歩的文化人（羽田救援の人々など）を中心に、日共の策動に反対する人々で「水曜会」という組織などが作られ、活動を開始したが、地方や組合、市民有志からのカンパが、どこへともなく消えている実体を打破り、救援活動を強力なものにすることが、財政負担とともに緊急の課題である。敵は、公判闘争が大衆闘争として激化することを予想して、六・一五の拘留理由開示公判を非公開にしたり、ハガチー事件の弁護人を制裁したりするなど、形破りの攻撃をかけてきており、われわれの立遅れが痛感されている。

大衆運動のないことが、彼等の最大の救いであり、池田内閣のやり口を覆つているといえよう。弾圧粉砕、不当拘留の同志を奪回する闘争は、池田内閣に対する最初の反抗として、ただちに大衆闘争で組まねばならない。学生戦線は、九月冒頭の闘争として、強力な学友奪回闘争を組織せよ！池田内閣のギマンを闘争で引きはがし、長期拘留を松川以上の社会問題とせよ！法廷闘争を勝抜くため、一千万円カンパを全同盟をあげて開始せよ！獄中の仲間に、激励の手紙を！本を！全国から集中しよう！

全学連・同盟関係拘留者一覧表

（四・二六）					
全学連委員長	唐牛　健太郎	同盟中央委員	富永　宏	明大	篠田　邦夫
社学同委員長	篠原　浩一郎	前全学連書記長	清水　丈夫	法政	藤本　正雄
（五・二〇――六・一一）		（六・一五）			
前東大中央委議長	鬼塚　雄亟	東大・経	杉浦　克己	同盟中央委員	大瀬　振
同盟労対	大島　芳夫	前早大全学協議長	宮脇　武士	同盟中央委員	常木　守
都学連執行委	田中　学	同盟労対	高橋　昭八	全学連副委員長	西部　邁
静大	佐藤　候夫	中大	小倉　征夫	東大教養	坂野　潤治
		中大	星山	明大	小川内　明広
		明大	関　勇	千葉大委員長	深谷　邦男

★手紙・本の差入れ出来る者、唐牛・篠原・大島・鬼塚・田中

★本のみ差入れ出来る者、富永佐藤、（ほかに近日中に数名許可の見込）

★手紙の宛先　東京都豊島区西巣鴨一ノ三二七七ノ一東京拘置所内

★カンパ送り先、問合せは、東京都千代田区西神田二ノ一ノ三吉田ビル　前田法律事務所内全学連不当弾圧対策部（電）（三〇二）一一六一

★食料・衣類・本等の差入れは前記へ連絡して行って下さい。

安保の首切り許すな

全金武蔵精機　西山君を守ろう

戦旗二十号“最前線”で匿名で発表された、全国金属品川地区支部武蔵精機労組の西山君の不当解雇反対の闘いは、その後「西山君を守る会」に結集した労働者の手によつて、あらゆる苦難をはねのけて進められている。

六月三日、首相官邸デモに参加した西山君は、混乱の中で逮捕され、二十四日不起訴で釈放されるまで、二十日間拘留されていた。同君は、友人を介して獄中から捕まつて欠勤している旨伝えて会社にわびてもらつていたが、釈放と同時に組合副委員長に電話しおわびをした。ところが、翌々日会社に出勤すると、工場長から「手当をやるからすぐやめろ」といわれた。

驚ろいた同君は分会に報告、組合の努力を願つたところ「円満解決」と称して、解雇でなく自分から辞職するよういわれ、執行委員会は「個人の問題だから、組合では取上げるべきでない」と結論した。しかし、同君の再三の要請によつて七月六日全金本部（阿部）支部（齋藤）分会三役の本人の対策会議が開らかれ（品川区労協参加の予定だつたが欠席）、ここで（イ）全金の統制を乱したから処分する。（ロ）就職規則から、解雇は適用できる。（ハ）統制違反で本人を処分して後に、会社に対する態度を決める（斉藤提案）。という驚くべきことが本人を除き可決された。組合から見放されたと知つた同君は、近くの勤労者学園等の友人に相談に行つたところ、たちまち翌日分会委員長に叱られ、（イ）日常活動に積極的に参加していない。（ロ）六・三は組合の統一行動に参加しなかつた。（ハ）問題を外部に持出し組合に迷惑をかけた。（ニ）組合に対し謙虚な態度でのぞむ。といつた点についての自己批判書を文書で提出するよう命じられ、提出しない限り会社との交渉はしないと申し渡された。七月十二日、同君は自己批判書を提出したが、本部（阿部）支部（斉藤）分会執行委は、これを認められないと突返したため、同君は大衆に直接訴える事を決意し、ただちに首切の本質と組合幹部の奇怪な態度をバクロするビラを、同労組はじめ全金系組合に配り、この結果、多くの反響と勇気づけを得た。これをきつかけに、同労組の労働者や、全逓大崎、東京計器、全国一般等の労働者を中心に「西山君を守る会」が生れ、精力的な活動を開始した。組合幹部はこれに動揺し、会社側と団交に入り「安保闘争の犠牲者だから、首切は撤回せよ」と交渉をはじめたが、一貫して本人を団交に加えることを拒み、七月三十日次のような主旨の「妥結」を行つた。

一、解雇は第三項を条件として取消す。

二、これは前例としない。

三、左記につき本人が文書で確認し実践すること。

①、今後政治的活動に名をかり、就業規則その他に違反せぬこと。

②、就業規則に違反し、会社の名誉をヒボウし、いちじるしく傷つけたことについて、ちん謝すること。

③、正当な組合活動外の不当な行動を行わぬこと。

右三項について直ちに誠意をもつて実践し、会社の期待にそわぬ場合は、会社のとるべき措置に対して異議なきものとする。

この内容は、明らかに同君の活動を一切否定し、今後の組合活動そのものも、ガンジガラメにしてしまうものであるため「守る会」の緊急会議を開いて闘いを続ける準備をしている。さらに組合幹部は、この「妥結」の後、西山君を組合から追放し、結局首切りを行わせるのではないかと見られており、さらに深刻な闘争が続けられよう。

安保闘争に対する、民間初の「首切り」として、さらにこの闘争の中で示された日共等の反革命的役割が最もするどくあらわれたものとして、闘争の中でかちとつた革命的路線を守り抜く鍵となるものが、この西山君問題である。「主婦と生活」の闘争が、全国から二千名をこえる「守る会」に支えられて闘い抜いたように、この東京品川の一工場の革命的労働者の回りに、全国から安保闘争のエネルギーを結集して行くことが、闘う労働者の課題である。

全国から、抗議と激励の手紙を！

全国の革命的労働者は、「西山君を守る会」に入ろう！

抗議先

武蔵精機社長　石谷来漢　品川区東大崎二の二九六

同組合委員長　山田　勝

西山君を守る会　品川区北品川六の三九〇　栗田申喜　気付

入会申込は、会費（一口五十円）をそえて、住所、氏名、所属団体を記して申込むこと。個人加盟、団体加盟共に可。特に全金傘下の組合の団体加盟が望まれている。

★　★　★

経済分析

資本が農業に求めるもの

農業問題の「曲り角」（二）

農業問題はこのようにして発生した。けれども、そのあらわれかたは国によつてことなる。とくに農業のような小商品生産は基本的には封建社会の遺物といつてよいものであるから、その形態はその国のおかれた歴史的事情に応じてちがつてくるし、従つて農業問題もさまざまなかたちをとるわけである。資本主義農業を展開した唯一の例といつてよいイギリス、フランス革命以来農地革命が徹底しもつとも典形的な小農的分割地農園をつくり出したフランス、封建的土地所有の上にユンケル経営とよばれる特殊な大経営を発展させたドイツ、封建的土地所有が解体されぬまま農民の土地欲求がみたされていなかつたロシア、未開の広大な原野に大規模な農業を発展させ帝国主義国と植民地という二つの側面をあわせもつたアメリカ、など、みわたしただけでも、その様相がことなることははつきりわかる。

ここで農業問題がもつと鋭いかたちであらわれたのは、封建的な諸関係がまだ十分清算されていないところだつたということに注意しよう。このことは、農業が封建社会からひきついだものを基礎にしており、資本主義にとつて異質なものをもつているということを基礎にしている。農業問題は、帝国主義段階の資本主義のらん熟期の資本主義の矛盾の集中的表現であるのに、あたかも資本主義がまだ十分に発展していないからおこるものであるかのようにみえる。この現象にとらわれ本質を見抜けないと、まずブルジョア民主主義革命によつて農業問題だけを解決し、それからプロレタリア革命だという二段階革命論がでてくる。労仂者階級がなすべきことは、ロシア革命でレーニンがやつたように、農業問題が資本主義の矛盾のあらわれであることをつかんで資本主義を打倒する労働者階級の闘いに農民を味方として結集してゆくことである。主要帝国主義国の中で最もおくれ、農業問題が最も鋭いかたちをとつていたロシアでまずプロレタリア革命がおこつたというのも決して偶然ではない。

農業政策とはこういう事態に対処するものである。それは決して、農民がかわいそうだというブルジョアジーの人間愛からでてきたものではない。みじめな状態につきおとされ、現在の社会に激しい不満をもつ農民の行動は、労働者階級の闘争に結集されてゆくことによつて、資本主義社会を打倒するエネルギーとなる。これをおそれるブルジョアジーは資本主義社会の枠の中で農業問題の解決をはかり、農民のみじめな状態を一時的にでも救済してやつて、農民の不満をなだめたり他の方向にそらせようとする。ファシズム、とくにナチスの農業政策は、その典型的な例である。

さて、このような農業問題がするどくあらわれたのは、世界的には一九世紀の七〇年代から九〇年代にかけての農業恐慌や、第一、第二両大戦間の農業恐慌においてであつた。とくに、大恐慌のなかでこの農業恐慌は破局にぶつかつた。ここでは、資本主義の全般的危機とよばれる事態が背景となつていたから、支配階級にとつて問題はきわめて切実だつた。アメリカのニューディールをはじめ各国で農業保護政策が一斉にとられたのはそのためである。その一般的な形は、戦争中及び戦争直後の食糧不足時代を別にすれば、農産物輸入制限による外国農業との競争遮断と、農産物価格支持による農民所得の維持だつた。もちろん、価格支持を行うには、それと競合する外国農産物の輸入制限が必要となる。そのいみで、この農業保護政策は、まえにのべた国際「自由」貿易の崩壊つまり全面的な貿易統制を必要とし、それを前提していた。

戦後十数年続いた、資本主義の「安定」は国際貿易について「自由化」を日程に上せたのと同様に、農業についても「農業保護政策の再検討」を現実の問題にしている。第一に、工業生産の発展にともなつて工業における労働力吸収が進み、相対的過剰人口のたまり場として農業に負担をかける必要がうすれてきた。こういう時には労働者階級もおとなしいし、政治的に農民に気謙ねする必要も少くなつた。第二にそうなれば財政支出をして農民保護をやる必要性もうすれてくる。世界市場の競争戦に勝ちぬくためにも、財政支出はブルジョアジーにとつて少いにこしたことはない。第三に、貿易「自由化」ともなれば、農業だけは例外だといつてすましているわけにもゆかない。貿易拡大のためには農産物の輸入も自由化する必要があるだろう。

ざつとこういうわけで従来の小農保護政策をやめて、安価な食糧と労働力の確保のために、農民分解をある程度スムーズに行わせ農業生産力を上昇させて、世界市場に雄飛する基盤を作ろうという政策があらわれはじめたようにみえる。だが、これはどの程度の現実性を、もつているのだろうか。【つづく】（Ｓ・Ｓ）

【おわび】これは、五月二十一日付第十五号の続きです。安保闘争の激動で、すつかり遅れたことをおわびします。編集部

国際問題

フランス→日本→イタリア

二流帝国主義国共通の苦悩

イタリアの政治危機

一九三〇年代の慢性的不況のどん底にたたきこまれた資本主義、わけてもドイツ、イタリー、日本等、植民地外国市場にほとんど足場をもたぬ、いわゆる第二流の帝国主義諸国＝「もたざる国」は、その深刻な慢性的不況からの唯一の脱出口を政治経済体制全体の国家主義的再編成に求めた。

一九六〇年の現在、国際的な貿易自由化を目前にして、フランス、日本、イタリーにおいては、ファッシズム、軍部独裁等の赤裸々な独裁形態ではないにせよ、強力な保守政権の擁立が決定的にカツ望されているのだ。現時点での資本主義はかつて、三一年の世界恐慌以後の世界資本主義のごとく具体的にその存亡を問われる体制的危機には陥つていず、資本の要請が、産業合理化を軸とした国内体制全体の再編成を最も巧妙に成しとげていくことである時、擁立される保守独裁政治家は、資本の利益の強じんな代辯者であると共に、その資本利害を国民的利害として幻想化する国民的支援の幻想性の保持が同時に必要とせられる。

かかる意味において、ドゴールは現代資本主義がまさに欲するところの恰好な政治家であつた。そしてフランスブルジョワジーは、すでに二年前の五八年五月旧来の弱体極まりない中道派連立内閣に代るところのドゴール独裁体制の擁立に圧倒的に成功したのである。

A

フランス資本主義がすでに経過し解決した状態に、日本、イタリーはフランスより二年遅れて立たされている。フランス経済の貿易は五九年度一年間に前年比五九％増というすばらしい飛躍をみせ、ドゴール経済政策の成果を物語つた。国際市場において、フランスが有力な一国としてすでに登場してきている現在、貿易自由化が具体的な、しかも加速度的なテンポで実施されることによつて、強制される国際競争は、国際市場における決定的な生死の問題を、脆弱な体制しかもちえぬ第二流の帝国主義国に提起せずにはおかぬ。

B

七月に入つて激発したイタリアの政治危機は、キリスト教民主党の中道派支配が完全に行き詰りに陥つた事実を暴露した。中道派支配体制の危機は中道派の主軸をなす与党キリスト教民主党内のぬきさしがたい分裂として現象した。時には左にゆれあるいは与党の分裂のまま政治的空白期を長期にわたつて生み出した結果、その下での「中道派政党に代る新たな政党」として飛躍しようとするネオファシストの暗躍とこれに対する左翼の衝突を生んだのだ。

キリスト教民主党の徹底的な再編とその上での右翼政権の樹立はイタリア資本家階級にとつて今や緊急の課題となつてきた。

C

イタリア資本主義はヨーロツパ工業国の中で、五七[illegible]中で、イタリア経済は注目すべき全機構的変貌をとげた。

イタリアにおける金外貨準備は一九五五年度下半期には三二億ドルというおどろくべき上昇を示し、英国をりようがすると共に、殊に年間十一億ドルの純増を示すという具合に、この数年間の著しい経済的発展をうらがきした。この輸出力の激増によるところの金外貨準備の増大において顕著なことは、かつてイタリア貿易の伝統的輸出品であつた繊維諸製品は見るべき増加を示さない反面、機械ならびに化学製品の輸出が大幅な伸びを示した事実である。しかも、これら重化学製品の輸出が西欧共同市場諸国ならびにアメリカ北米市場であるところに、この数年間のブームの過程において、イタリア独占体が組織的に確立された事実をみる事ができる。しかも、これら独占体は、日本独占のごとく、資本市場の払底、株式、社債による自己金融力のぜい弱性に悩まされることもなかつた。資本市場における社債登記利子の引下げにも拘らず、五九年下半期の資本市場における資金調達率は、前期の八四％増、社債発行高は同一三八％増と激増した。この日本には見られぬ資本市場の伝統に助けられつつ、しかもなお、現在一五〇万を数えるといわれる構造的失業人口の圧迫による決定的な低資金を武器にして、イタリアの巨大独占体は飛躍的成長をとげると同時に欧米先進諸国の市場へと進出を開始したのである。

D

すでに今年七月一日、イタリアを含むヨーロツパ共同市場六カ国は、その関税引下げに決定的第一歩をふみ入れた。戦後世界において類をみない各国金融資本の闘争の新しい時代は、ヨーロツパ共同市場におけるハルシユタイン案の実施でその幕をきつておとした。輸出貿易、なかんずく共同市場以外の輸出貿易に依存度の著しい西ドイツの反撥と共同市場との貿易関係なしには存在しえぬイギリス資本の強固な抵抗の前に、域外諸国に対するところの対外共通関税については、その税率はおよそ当初計畫の二分の一に、その実施期日は半年間それぞれ延期されるという修正をうけたもの、共同市場域内諸国における関税の引下げは、無修正の中に実施された。

関税障壁が急速に撤去され、共同市場六カ国が一元的な市場圏を形成する事態にあつて、イタリア独占体が強力な地歩を築いていくためには、国内支配秩序、あるいは、イタリア機構全体は、西ドイツ、フランス[illegible]合理化に抵抗するプロレタリアートをたたきつぶして行くブルジョアジーの圧倒的な政治的優位と、強力な支配秩序はいまだ確立していない。しかも、ヨーロツパ最強のプロレタリアートに対する与党キリスト教民主党を中軸とする中道派内閣は、イタリア独占体の意志を貫徹する政治体制を組織しえず烈しい同与党内部の左右対立の抗争にあえいできた。セニの崩壊に端を発したイタリアの政治危機は、それ故、従来の中道派議会政体に代るところの強力右翼政体（＝飛躍的に経済力を強化したイタリア独占体の直接的代弁者）の樹立過程となつて展開しているのだ。

二月二十七日セニ内閣は崩壊した。キリスト教民主党を中心に自由党、共和党および社会民主党の四党に基盤をおいてきたセニは、比較的「リベラル」な政策をとり、主としてキリスト教民主党左翼を支柱にしていた。又場合によつては、議会内での社会党及び共産党との協力支持も辞せず、五七年秋の農業協約更新法案、軍人恩給法案などはキリスト教民主党右派の烈しい反対にも拘らず、これら左翼政党の支持によつて議会通過をはかつてきたのである。セニあるいはファンファーニにひきいられるキリスト教民主党左派のこの「左にふれる」性格は、キリスト教労働組合の組織の下に、一定のプロレタリアートを組織し、労働組合に一定の足場をえているところから来ていた。これに対してタンブローニを頂点にもつ右派は、増大する独占体の強化を背景に、このファンファーニ、セニ等の左派との間にぬきさしならぬ対立をじよう成してきた。この与党、キリスト教民主党内における分裂はセニに次ぐ後継内閣の構成政党にネオ・ファッシストの二四票を数えるか否かをめぐつて爆発し、ここに二カ月にわたる空白期が生み出されたのだつた。

セニの崩壊の端緒は、農業政策に対する自由党の右翼的反撥とそれに続く自由党の内閣支持の停止であつた。それ故、後継内閣はセニとほぼ同質の中道派内閣であろうとも、いや応なしに極右諸派の支持を計算にいれた右翼的性格をもたざるをえない。四月八日、イタリア下院において、タンブローニ内閣は、三〇〇対二九三、過半数をわずか三票上回る僅差によつてかろうじて信任された。賛成三百のうちにはキリスト教民主党以外には、ネオ・ファッシスト党だけが含まれていた。

だがネオ・ファッスト党支持が公然と表明されるのファッシストの支持を拒否して辞任、これに続いて、ザカニーニ労働相、コロンボ商工相以下七名の主要閣僚も続々と辞表を提出、ここに信任後、わずか二日にしてタンブローニ中道右派内閣もつぶれ去つた。

E

イタリア議会における第一党でありながらも深刻な内部抗争をさらけだし、その内部対立によつて、強力な政治秩序を創出しえぬ、キリスト教民主党に対する大衆の政治的信頼の低下、そして、政治委員会の空白状態に対する大衆の政治的関心の昂揚、しかも、キリスト教民主党の抗争がネオファシスト党をめぐつて展開してきたという事実、これにいたつて、イタリア社会運動（ネオファシスト）は、大衆の政治的関心を一挙にとらえ、しかも、キリスト教民主党に代る新鮮な政党として大衆的基盤を樹立しようと計つた。

七月一日、ネオファシスト党は党大会の開催を決行しようとした。党大会を皮切りに、一気に大衆的勢力の拡張に入ろうとしたネオファシストに対し、イタリア共産党はこれを事前に妨害しようと、党大会会場に向けてデモを敢行、ここに左右両翼のデモ隊が激突した。

それ以後、十日間、一〇〇名を越える逮捕者と十一名の死者を出しつつ、イタリア全土は数萬のデモ隊と警官隊との衝突をくりひろげた。

しかし、イタリアネオファシストが未だ十分な大衆的基盤をもつていない状況は、闘争の内容を、左右の街頭における激突から、これを直ちに労働者デモと警官隊との激突という反政府闘争の方向に押しやつた。イタリアネオファシストが独自の、労働運動に対抗しうる大衆運動の独自な基盤をほとんど持つていない以上、イタリア左翼の方向

F

だが十日間の激突の性格と、政治指導に関して意識的な方向性がただの一度も提起されぬままに、日本における安保闘争とは、対称的に「奇妙な敗北」として終熄せしめられた。一九二二年、世界史において初めてファシズムの権力下におかれて以来、以後二〇年間以上、ファシズムの弾圧下に呻吟したイタリア労働者は、ネオファシスト党大会を前にして自然発生的に怒りの行動に立ち上つたのである。だがその怒りの行動は、共産党の支配するイタリア労働総同盟が政治休戦を受諾し、政府は高圧的にこれを一蹴するという関係が固着したまま終熄せしめられていつた。

「政治休戦」の一方的無視の高圧的態度を前にしてこれを受諾することは、屈服を意味するものでしかない。そしてこの政治的力関係の隔差は、有効に用いれば現行政権の強化に明らかに役立ち得るものとなる。だが、朝には左にゆれ、晩には右にゆれするイタリア中道政体の動揺性は、この事態をブルジョア政治委員会の強化に引き継ぐ態勢をとることなく、逆に、現タンブローニ政府の辞職と新たなる中道派内閣の組織による大衆的不満の鎮静という道をとらせたのである。イタリアからの報道は、ほぼ前内閣と同様の中道左派のファンファーニが主班となるであろうと、傳えている。

G

だが次期中道政権の運命もそれがファンファーニによる中道左派であろうと中道右派であろうと、不安定かつ一時的な短命内閣であることに変りはない。それによつて、五七年以降の巨大な蓄積を足がかりに、一段と成長しようとするイタリアブルジョアジーの要望は何一つまとまつて解決はされえないであろう。ドゴールについで強力政権を擁立し、この中道内閣による政治支配の形式を止揚することは、十日間の衝突を見た後、旧来にまして必至の課題となつてきた。

弱体な中道政権は何一つ解決しえぬどころか七月七日の衝突のごとき、左右勢力の増長とその対立の拡大してゆく温床にしかならない。

フランス資本家階級は、五八年五月において、アルジエリアファシズムをドゴールの登場によつて屈服せしめることによつて、転じてこの危機的事態に何ら対応しえなかつたプロレタリアートに巨大な敗北感を与えることに成功した。ドゴールの登場による支配秩序の更迭は、それゆえ、ふつとうする階級闘争を媒介とした極めて攻撃的なものであつた。だとする時、イタリアにおいて事態はいか様に展開するか？

イタリアにおける事態はフランスにおけるごとく、ブルジョア・プロレタリア・ファシズムと三者が烈しくせりあうという階級闘争の展開において、ブルジョアジーの政治的支配体制の更送が一挙に成しとげられるという劇的な様相を真近に予想することはできぬ。それは、目下のイタリア資本主義にあつて、小ブル階級を不安と危機の渦中におとしこみ、かれら自身を独自の大衆運動にかりたてる決定的な契機を欠いているからだ。たしかに中道政権の行き詰りはそのような契機の発端になりうる。だが小ブルジョア階級を政治過程にひき入れるためにはかれらの生活基盤にひびが入るような危機的契機が必要なのだ。今、未曾有のブームに到達しているイタリア社会には、ネオファシストが単なる議会での一政党から大衆運動を基盤にしたところのファシズムに転化しうる現実的根拠は、存在しない。それゆえ事態は、まずブルジョアの手によるブルジョア政党の再編成へと進む。そしてイタリアブルジョアジーはキリスト教民主党の再編成を右翼のヘゲモニーの下に行なわしめ、強力な右翼政体の樹立を目指すにちがいない。そしてこの与党内部の抜本的再編成は、この秋に予定されている地方選挙、そして総選挙の過程でなされるのだ。この選挙によつてキリスト教民主党右派が伸長すれば、いわゆるイタリア極右諸党派をも巻込んだ強大な右翼内閣を組織し、その下で、イタリアプロレタリアートに対して巨大な政治的打撃を与える政治攻勢をしかけてくるであろう。ちようど日本資本家階級が安保に託したごとき政治攻勢を、その戦力において、ヨーロッパ随一を誇るイタリアプロレタリアートにしかけてくるにちがいない。

だが秋の選挙において、右翼的再編成のプランが実現されずに、依然としてキリスト教民主党左派が右派とせりあう状況を再生産した場合は、いわゆる政治危機＝統制力のない中道内閣の下にプロレタリアートと右翼の対立が激化する危機的事態は一層昂進する。

その政治危機がずるずると、世界的な景気循環の逆転時まで連続すれば、異常な投資景気にわきたつている事態が深刻な不況に転ずる時に、中道派支配の不安定状態がもちこされるならば、事態はほぼ五八年五月のフランスの様相を帯びざるをえなくなるであろう。経済不安の状態は、ネオファシストが大衆化し、いわゆるファシズム運動を巻き起す契機を形成するにちがいない。

学生活動家必読の書！
「闘う全学連」（オ二集）
発売中！　定価百円
千代田区神田神保町二ノ四
リベラシオン社